

# 悠ゆう楽々

铸造した観音像とその前に立つ  
耕造さん(2012年9月ごろ)



## この人と

金壽堂社長

黄地 浩さん

「もう一度、あの人と火入れの瞬間を分かち合いたい」

寺の梵鐘や銅像などを作る鑄造メーカー・金壽堂(滋賀県東近江市)の社長、黄地浩さん(61)には「今の自分があるのは『あの人』のおかげと言いつける人がいる。」

伯父で、前社長の黄地耕造さん(83)。2013年1月末、脳梗塞で倒れた。幸い一命は取りとめたが、歩行と会話が困難になった。今も、闘病を続けている。

倒れた日の約2週間後には、11年の東日本大震災で被災した寺院に寄贈される梵鐘の鑄造式「火入れ」が控えていた。職人であり、火入れを取り

## 闘病の伯父に恩返し

仕切る「指揮者」でもあった耕造さんが倒れた混乱の中、浩さんは他の職人たちと共に鑄造をやり遂げた。無我夢中だったといっている。

その後は、思い悩む日が続いた。会社をたたむべきか、それとも自分が後を継ぐべきか。耕造さんの意思を確認することもかなわず、気持ちが揺れ動いた。

もともと、浩さんは仏像を彫る仏師として生計を立ててきた。金壽堂にきたのは、10年の秋。その頃、熱心な門徒でもあった耕造さんは、真宗大谷派真宗本廟に寄贈する重さ4・5トンの大梵鐘を鑄造しようとしていた。

「手伝ってくれ」。耕

造さんに頼まれるまま大梵鐘の鑄造に携わり、そのまま梵鐘作りについて学んだ。火入れの現場、納品の現場。耕造さんは職人気質で寡黙な人だったが、身近に接するにつれ、単なる「もの作り」ではない梵鐘作りの奥深さが伝わってきた。

耕造さんと仕事をしたのはわずか2年余り。その自分に、後を継ぐ資格があるのだろうか。浩さんは悩んだ。

周囲には心配や反対の声もあったという。それでも浩さんは、悩んだ末に会社の継続を決意する。金壽堂がある長町は700年前ともいわれる昔から鑄物作りが盛んで、職人たちは「長村鑄物師」と呼ばれた。「長村鑄物師の伝統を絶やしたくない」。その思いが背中を強く押した。

「やめるのはたやすいが、耕造さんと同じ思いで続けてきたはず」。伝統を受け継ぎ、梵鐘を作り続けること。浩さんから耕造さんへの恩返しでもある。

(三輪万明)